

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.03

2017.12



Take Free

サーフィン、ライフセービング、そして「波伝説」。

文・森 休八郎



浦賀水道に面した、横須賀・鴨居漁港。

少年が、走っている。一方の手に釣竿を、もう一方で10円玉を握りしめた少年が、走っている——。

それから50年以上の時が過ぎた。かつての少年は、あの頃と同じようなまなざしで、海を見つめていた。

加藤道夫。サーファーにとって今や欠かすことのできない波情報「波伝説」や、釣り人・漁師向けの情報「海快晴」を発信する気象予報会社「サーフレジェンド」の社長である。最初は遊び、そして趣味だった海とのかかわりは、やがて仕事へと結びついていった。いったいどんなきっかけで——。

10円玉を握りしめて

加藤は1957年12月、鴨居に生まれた。海が、漁港がすぐそばだった。幼い加藤少年の興味を引いたのは、釣りだった。加藤は思い出す。

「学校から帰ると毎日のように、安いリールをつけ4冬ならカレイ、それにアイナメなども釣れた。エサはゴカイ。握りしめていた10円玉は、その代金だった。

「毎日のようにエサ屋さんに行くと、そこのおばあさんが売ってくれるんです」

ところがのちになって、ゴカイは10円で買えるものではなく、50円から100円はするものだったことを知る。

「昔お世話になりました、とあいさつに行き、いきさつをお話ししました。そしたら『あー君か』と。毎日のように10円持ってくるものだから、断り切れなかつたみたいですね」

漁村だけに、小学校のクラスメートも漁師の息子が多かった。

「友達のおやじが、『道夫、釣れたか?』と聞いてくる。『釣れな

い』と答えると、魚をポーンとくれたりしました」

小学校3年生まで鴨居で過ごした後、父親の仕事の関係で磯子に転居。海からはやや遠のいた程度だったが、青春時代はバレー・ボーラー、そして草野球に熱中した。俊足巧打、そして堅守のセンターだった。

横浜市立金沢高校に通い、なんとなく大学進学を考えていたころ、進められて横浜市役所を受験した。結果は、合格。「『大学に進んで、4年後市役所を受けても合格するかどうか保証はないぞ』という周囲の声もあり、そのまま就職することにしました」

ところが、当時は高度成長時代で市役所も職員が多数採用されたため、4月と10月に分けての採用となつた。加藤は後者となり、高校を卒業してから半年ものブランクがある。

「アルバイトしましたよ。体を使う仕事でしたが、月に15万円は稼いでいました。で、10月に入所してびっくり。市役所の給料は7万7000円でしたから、一気に半減でした」

最初は横浜市金沢区役所に配属され、加藤の社会人人生が始まった。

悔しかった最初の「出会い」

就職後も野球に明け暮れていた、20歳の夏。加藤はその野球仲間が、サーフィンに夢中になっていることを知つた。じゃあ自分も連れて行ってもらうか、と、千葉の鴨川に向かつた。

「ぼくは水泳も得意だったし、簡単にできるだろうと思っていました」

ところがその日の鴨川の海は風が強く、今から思えば、沖に出るのはかなり困難なコンディションだった。それでも加

藤は、体力任せのパドリングで海へと出た。「20分ほど必死に漕いでも、いつこうに出られないんです。休憩を何度も挟んで挑戦したんですが、無理。結局初サーフィンはボードに立つことはおろか、アウトに出ることもできずに終了でした」

この現実は、加藤のプライドをいたく傷つけた。帰りの車の中ではずっと仏頂面だったことを、今も思い出すという。そして加藤の闘争心に、火がついた。

「もう悔しくて悔しくて、それから辻堂で毎週のように“コソ練”ですよ。当時は磯子に住んでいましたが、そこから真っ赤なワーゲンのビートルで、辻堂に通っていました」



当時市役所の勤務は、日曜は休日、土曜日は半ドン(午前のみ勤務)だった。そうなると、土曜の午後と日曜日しか海に入ることができない。有給休暇をいかにサーフィンのために使うか、ということにも心を碎いた。だが、やる気マンマンでやってきてても、海のコンディションがサーフィン向きではなく、空振りに終わることも多かった。

「当時、辻堂に『サーフ＆サンズ』というサーフショップがあり、時々顔を出していました。店員の女性はかわいいし、店内にはムスクの匂いがして、湘南らしいとてもおしゃれなお店だったのを覚えています。ちなみにそのお店があったまさにその場所に、今サーフレジェンドがあります。これもご縁なのでしょうね」

その「サーフ＆サンズ」が無料で行っていたのが、辻堂の波情報を教えてくれるテレホンサービスだった。毎日11時に更新されるこの情報に耳を傾け、さらに自分でも天気図を見て、海の状況を予測するよにもなった。これがのちの「波伝説」の原点となり、加藤の人生の縦糸を作ることになる。

「1990年代あたりまでは、サーファーはロン毛が多かつたんですよ。ぼくも公務員のくせに長かった。役所の先輩からは『ドイツ軍のヘルメットみたいだな』なんて言われたものでした」

サーファーとして海に入り浸っていた加藤だったが、今度は仕事でも海とかかわることになっていく。

「海の公園」担当に異動

加藤は24歳の時、横浜市港湾局に異動し、横浜市金沢区の「海の公園」担当となった。

「海の公園」は、金沢地先埋立事業の一環として、横浜市が整備したものだ。1980年に人工海浜が暫定的にオープンしたが、さらに海水浴場の開場も計画されていた。

「横浜市は、かつて海水浴場だった浜をどんどん埋め立てていきました。そこでここに人工海浜を造ることで、海岸線を市民にお返しする、という発想がありました」

暫定オープンした砂浜は、たちまち人気スポットになる。というのも、アサリやバカガイ(アオヤギ)が大量に獲れることが知れわたったからだ。ゴールデンウィーク前後には数多くの人が訪れる。管理業務に明け暮れて休日などないに等しく、なんとか平日に休みを取ってその埋め合わせをするほどだった。

「この砂浜は、100分の1勾配(100m進むと1m下がる)で造られているんですが、これがアサリにとっては理想的な環境だったみたいです。潮干狩りで有名なところの中には、シーズン前に稚貝を撒いたりしていますが、ここでは一切やっていません」

加藤が忙しかったのには、管理業務以外にも理由があった。それは、海水浴場オープンのための準備作業だった。

「運営ノウハウなど市にはありませんから、何をかもがイチからのスタートでした。ぼくは、特に重要な“ライフセービング”に力を注ぎました」

当時横浜市内では、ライフセービング講習会や水上安全法講習会などは行われていなかった。そこで藤沢市まで行って、海水浴場の監視員に交じって日本赤十字社の水上安全法講習会を受講した。もちろん加藤も受講者のひとりである。それは過酷だが、充実したものだった。



ライフセービングへの目ざめ

1987年7月20日。「海の公園海水浴場」の正式オープンは翌年からだったが、すでに泳ぎ始める子どもたちが少なくなかったため、翌日からの夏休みに備えて、加藤は「海の公園」で、監視員となる学生たちとともに監視タワーの設置など安全対策の準備に没頭していた。

そこに、急報が届いた。砂浜のすぐ近くで子供が溺れた、という。加藤は高校2年生の監視員とともに現場に向かった。

「行くと、売店内の床に小学5年生の男の子が横たわっていました。意識はなかった。知らせを聞いて駆け付けた男の子のお姉さんは、変わり果てた弟の様子を見て泣き叫んでいました。男の子は、亡くなりました」

当時、ライフセーバーを含む一般人への救急救命講習の中には、人工呼吸法はあったが心臓マッサージは「医療行為に該当する」ということで認められていなかった。

「ぼくも、高2の監視員も激しいショックを受けました。それではだめだ、とそれから本格的にライフセービングに関わるようになりました。高2の彼も、以来ずっと監視活動を続けています」

加藤にとっての人生の横糸——ライフセービングとのつながりは、この事故がきっかけで深まった。指導員の資格を取得し、各地で開く講習会ではインストラクターとして後進を指導。また2016年まで4期12年、神奈川県ライフセービング連盟理事長を務めた。だが、

「日本のライフセービングの限界を感じました」と、加藤は言う。



「日本のライフセービングは、夏の海水浴客のためだけの監視活動で、学生のアルバイトが中心です。一方、海外のハワイ、カリフォルニア、オーストラリアなどでは、マリンス

ポーツのすべてを見守り、ビーチ全体の安全安心をコントロールする、公務員の『ライフガード』が配置されている。日本のライフセービングの最大の問題は、公務員としての、プロとしての『ライフガード』になれない、ということなんです」

加藤自身が地方公務員だけに、この現実は痛いほど理解できた。が、もし常駐のライフガードがいれば男の子は助かったのではないか、という悔恨の思いもある。

「各大学にライフセービング部があり、その部員は大学時代をそこにつぎ込んで頑張っています。ところが、卒業とともにライフセービングから離れてしまわざるをえない。4年間で得た経験や知識が生かされないので。もし、職業としての『ライフガード』が確立できれば、彼らにとっても、海で遊ぶ人にとってもいいことなのに、という思いは、今も強くあります」



波情報、発信!

多忙な中でもサーフィンは続けていた、30代半ば。サーフィン雑誌である情報を知った。

「アメリカに『800番』という、日本の『ダイヤルQ2』の原点みたいな電話サービスがあり、その中に、1ドルの有料波情報の提供がある、というんです、これはいいな、と思いました。こういう波情報があつたらみんな喜ぶぞ、と」

おりしも、日本でも「ダイヤルQ2」サービスが始まろうとしていた。加藤は、鎌倉・七里ガ浜に住む友人とともに、「七里

ガ浜サーフィンフォメーション」を立ち上げたのだ。
「売り上げがウェットスーツ代になればいいね、くらいの気持ちで始めました。毎日朝5時と24時に、七里ガ浜の波情報を録音して流しました」

最初は軽い気持ちで始めたものだった。が、運命は転變する。

「ぼくと同じ年で同じ月生まれ、しかも双子のようによく似ていると言われ、親友として付き合っていた従兄弟に肺ガンが見つかり、あっけなく亡くなつたんです。急に『死』が身近なものになり、人生とははかないものだ、という思いにとらわれました」

役所では、上司から管理職試験を受けるように勧められていた。一方の波情報は、友人が本業に専念せねばならない事情が生まれ、存続が危ぶまれる状況になった。加藤は、考えた。

「サーフィンにこだわっていだし、波情報にもこだわりがあった。妻と子供2人を抱えていたけれど、まだまだ体力はある。“よし波情報をやる！”と決心し、18年勤めた横浜市役所を辞めて、有限会社を設立し、波情報に専念することにしました」

七里ガ浜から湯河原までの10のポイントを1日2回往復し、自分の目で海のコンディションを確かめる。さらに気象予報会社から直接情報を買い、その2つを合わせて、独自の情報を発信する。これが人気を呼び、情報エリアもどんどん拡大していった。

海の安心安全を

その後、FAXによる配信、1999年から始まったNTTドコモの携帯電話サービス「iモード」での情報発信、さらにスマホ

時代の到来で、アプリを利用したサービスの提供と、メディアの変遷に合わせて発信形態を変えてきた。

その間、京都大学防災研究所と産学共同研究を行い、独自の波浪予測システム「Wave Hunter」を開発して特許を取得。「波伝説」と「海快晴」の情報は、さらに精度を高めている。今後は、アジアにまでエリアを広げたいともぐろむ。

もちろんここまで順風満帆だったわけではない。パートナーを組んでいた会社との関係を解消せざるを得なかった時には、17万人いた有料会員がゼロになる、という地獄も覗いている。

それでも加藤がめげないのは、「海の安心安全」に対する執念があるからだ。加藤にとっての“縦糸”である波情報は一見、サーファーに「いい波」を教えることのように思えるが、裏を返せば、危険情報を届けることでサーファーの安全を守っているものもある。

そして、「ライフガード」のプロ化という“横糸”も、加藤の胸中にずっとある。「オリンピックを起爆剤に、日本はさらなる外国人観光客の誘致に力を入れていますが、日本の海

は、充分に観光の売りになると、ぼくは思っています。湘南を見てください。海でサーフィンやマリンスポーツを楽しみ、鎌倉で日本の文化に触れ、箱根で温泉を満喫する。これが湘南のよさだと思います。が、そのためには、プロの『ライフガード』が、どうしても必要なんです」

12月に還暦を迎えた加藤。だがその若々しいエネルギーが衰えることはない。少年の日と同じように、加藤は今も、走っている。



湘南大学×シネコヤ「おしゃべり考房」開催報告

湘南大学のプレ講座「おしゃべり考房」を11月11日(土)、18日(土)の2回

シネコヤさんとのコラボレーション企画として開催しました!

湘南大学は、湘南ビジョン研究所が設立準備中のソーシャル系大学(市民による市民のための学びの場)です。そのコンセプトのひとつ「街が教室」を象徴するイベントとして、今回のコラボレーション講座を企画しました。ご協力いただいたシネコヤさんは、「映画と本とパンの店」として2017年4月に鵠沼海岸にオープンした、街の小さくてすてきな映画館です。「おしゃべり考房」は、気軽な対話を通じて学びあうことを目的とした講座です。みんなで意見を出し合って結論を求めるのではなく、率直な感想やモヤモヤした思いなどをお話しし、聞き、その中から気づきを得たり内省を深めたりすることを目指しています。

今回のテーマは、“少女の探しもの”。映画に登場する少女の成長を切り口にして、まわりの大人たちの関わり方や社会的背景などにも目を向け、広い意味でのこれから生き方について話してみよう、ということがねらいです。当日は、湘南ビジョン研究所理事でキャリア・コンサルタントの中村容がファシリテーターを務めました。参加してくださった皆さんとシネコヤ店主の竹中翔子さんに感謝いたします!



11月11日(土) 映画『プランカとギター弾き』みて話そう!【参加者8名】

フィリピンの路上で暮らしながら、お金で母親を買おうとする少女プランカと、盲目のギター弾きピーターのちょっとファンタジックな物語。

上映後、ライブラリースペースでお茶を飲みながらのおしゃべりは、あっという間の90分でした。はじめに、それぞれが印象に残ったシーンや台詞、登場人物への想いを話したり、作品の製作背景など創り手側の意図を推察したりと、話題はどんどん広がり深まりました。シネコヤ店主の竹中翔子さんから、作品に対するシネコヤ的解釈を音響の細かな調整などに込めていることや、いつしょに上映する2本の組み合わせを大事に作品選定しているなど、興味深い話を聞くこともできました。



11月18日(土) 映画『鏡は嘘をつかない』みて話そう!【参加者5名】

美しすぎる珊瑚礁の海の風景と、漂海民バジョ族の暮らしが丁寧に描かれている素敵な映画。参加者の皆さんも、舞台となつたインドネシアの「ワカトビ」という海域も、バジョ族も初めて知ったということで、まずは盛り上りました。

話題は、主人公の少女や彼女を支える少年のピュアな心情や、キーアイテムとして出てくる鏡とドレスの意味は? などで熱く展開。他にも、家族やコミュニティでの人の関わり、変わりゆく自然環境と生活への影響についても拡がり、最後は地元藤沢に映画館が5つもあった時代の話、子どものころに映画館でみた作品のことなどにも及びました。

11月11日(土)～24日(金)の2週間、「おしゃべり考房」開催に合わせて、湘南ビジョン研究所の活動を紹介する展示も行いました。シネコヤファンの皆さんにも知っていたらよい機会となりました。

11月16日（木）鎌倉市の県立深沢高校で 1年生対象の「NPO見本市」に参加しました。

この行事はNPOを通じて地域を知り、その活動に参加する事によって、教育理念である「自主性を育てる事」を目標に、数年前から行われているものだそうです。

参加した12のNPO団体は、1コマ30分の授業（定員25名）を3回開催します。生徒さんはその中から、事前に興味のある授業を3つ申し込むのですが、湘南ビジョン研究所の授業は全て満員、計75名もの生徒さんとお会いする事が出来ました。

授業内容は、団体の紹介や活動報告を通じて環境問題を学んだ後、会員の寺尾太伸さんによる「シーグラスを使ったアクセサリー作り」の体験。

初めての作業に戸惑いながらも「せんせー！どうなっているのかわかりません！」「テリーさんすげえ！」「引っ掛ける所をハートにしたいです！」など、和気あいあいとした雰囲気。それぞれの個性輝く「海を大切に守る約束の証」シーグラスのペンダントを作り上げました。

終わってみると伝えたかった事、聞いてみたかった事などが次々と浮かび、30分では時間が足りなかった！ 次回も参加したい——と一同若返った気分。私たちも素敵な時間を頂戴しました。沢山のはにかんだ笑顔にまたお会い出来る日を、楽しみにしています。 （文・郷渡美夏）



12月10日（土）に湘南大学プレ講座 「海の見える農園 de みかん狩り！」を開催しました。

講座＆みかん狩りの場所は、小田原市にある海の見えるみかん農園『UMEMARU FARM』。

小田原で最も若手のみかん農家・守屋佑一さんから、農業の6次産業化についてレクチャーしてもらい、その後はみんなでみかん狩り。

真っ青な海とオレンジ色のみかんのコントラストに彩られた最高の景色のか、20名の参加者で楽みました。

守屋さんによると、神奈川県は日本のみかん栽培の北限で、歴史的に古いそうです。小田原が冷凍みかん発祥の地だったり、東海道線のオレンジと緑は小田原のみかんをイメージしたものだったり……。

都心に近くで輸送コストもかからないため、実はあんなお菓子、こんな商品に使われていたりする小田原みかんですが、その割にはなかなかブランド力がなく、価格も低迷しているのが悩みどころ。そんななか、守屋さんは神奈川県が開発した、幻のオレンジと言われる高級柑橘「湘南ゴールド」に注目。これを使ったご当地エナジードリンク「SHONAN GOLD ENERGY」を開発し、小田原を中心へ、販売網を着々と広げています。

将来は「SHONAN GOLD ENERGY」を、愛媛のあのオレンジジュースのような、神奈川県民のソウルドリンクにしたいと語る守屋さん。

みなさんも、「SHONAN GOLD ENERGY」で寒い冬を乗り切りましょう！

（文・片山久美）



Information

湘南ゴールドエナジーで「黄金の体験を。」

神奈川県が開発した新感覚オレンジ「湘南ゴールド」をご存知でしょうか?

その黄色い外観からは想像もつかない独特の甘さと華やかな香りで、一躍神奈川の名産へと躍り出ました。

我々「UMEMARU Inc.」は、この果実に着目し、2016年5月より果汁を使用したエナジードリンク「湘南ゴールドエナジー」を開発、販売しております。

エナジードリンクとしての成分は、一般に販売されているものを参考にしました。「湘南ゴールド」の果汁を使用したおかげで、エナジードリンク独特の癖が軽減され、後味に独特の甘みを出すことに成功し、エナジードリンクが苦手な方にも飲みやすくおすすめです。また、ドリンクに使用されている一部果実は自社農場で栽培したものを使用しています。



2018年2月には、「黄金の体験」をドリンク以外でもサポートするために、自分たちでリレーマラソンの開催を行います。日本初のフットサルとのコラボイベントです。

(詳細は以下をご覧ください。<https://www.zucc-sge-relay.com/>)

他にも皆様に喜んでもらえるような様々な試みを考えております。湘南では「湘南ゴールドエナジー!」といった、新たな地域発のカルチャーとして根付いていければと思っています。

ぜひ、黄金の体験を。



株式会社UMEMARU Inc.代表

守屋佑一

*お問い合わせは

0465-34-6423 mori19880519@gmail.com まで

Let's have fun!
配布・設置していただける
場所を募集しています



このドリンクのテーマは、「黄金の体験を。」

目標への挑戦、湘南で頑張る人たちキラキラと輝く素晴らしい体験をサポートしたいと思い、湘南国際マラソンやオープンウォーター、そして湘南ビジョン研究所をはじめとした、様々なスポーツイベントや地域活動をサポートさせていただいております。また、自分達でもCSR活動として、実際に山や海の清掃を行っています。湘南エリアの一部コンビニや駅の売店、変わったところでは足柄・金時山の山頂や温浴施設、スポーツ施設などご購入いただけますが、もっと皆様に飲んでもらえるように、一つでも多くの場所で販売できるよう頑張っていきます。皆様の「黄金の体験」の際に是非試してみてください。また、お取り扱いをご希望される方は、ぜひお気軽にお声がけください。

富士山を眺めながら、
湘南ゴールドエナジーで乾杯。黄金の体験を。



湘南ゴールドエナジーは、神奈川で作られた
ミカンを使用したエナジードリンク。



PUBLISHER: 片山清宏
EDITOR IN CHIEF: 森休八郎
ART DIRECTOR: 大戸千尋
EDITORIAL STAFF: 片山久美 中村 容
郷渡美夏 ニシオエイコ
COVER PHOTO: 芹川明義



<http://shonan-vision.org/>



@shonanvision



info@shonan-vision.org